SPACE No.46

日本臨床心理身体運動学会会報第 46 号　　2025 年 7 月 20 日

編集発行　日本臨床心理身体運動学会　会長　山中康裕

【第 79 回研修会・第 50 回講習会】

2025 年 6 月 1 日（日）に、御幸町四条下ルという京都市の真ん中で、第 79 回研修会と第 50 回講習会が、対面及びオンラインのハイブリッド形式で開催されました。当日も様々な議論になりましたが、事例提供者と、1 名の参加者の方からコメントを頂きました。

【第 50 回講習会】『生と死の境界を越えて私の「物語」を生きる』に参加して

東邦大学　澁川　賢一

初夏の清々しい陽気の下、節目となる第 50 回学会講習会が、心理臨床学の礎の地である京都で開催されました。四条の繁華街に隣接する会場には、非学会員を含む多くの参加者が集いました。

今回の山先生のご講演のテーマは、「生と死の境界を超えて『私の物語』を生きる」でした。これまでにも本学会の講習会や大会でのワークショップにおいて山先生のご講演を拝聴してきましたが、表現芸術やイメージに関する考察・考証を通じて臨床場面と深く響き合う先生の洞察には、いつも感銘を受けていました。今回もその期待に違わず、自分自身を省察する貴重な機会となり、大変有意義な時間を過ごすことができました。

私自身、「死」や「生」というテーマは、身近でありながらもどこか遠いもののように感じていました。それは、（今は）身体的にも心理的にも自分が健康であると認識できる状態にあるからかもしれません。山先生はご講演の中で、「セラピストとして『死』の世界に開かれていることで、クライアントとの間で展開されていくことがある」こと、そして「心理療法では、生と死の境界を超えて、クライアントの『生』を見つめる視点が求められるのではないか」と指摘されました。その言葉を受けて、面接室に訪れるクライアントの死生観を、私はどこかで軽んじていたのではないかという思いが湧き上がりました。様々な「生と死の境界を超えて」、誰もが命懸けで生きているという現実、そしてクライアントは命をかけて面接室を訪れているという事実――そのことを改めて深く考えさせられました。

私が深く関わってきたスポーツの世界でも、死に物狂いで身体や精神力を鍛えることや、選手生命を脅かす怪我や傷害など、「生と死の境界」が常に隣り合わせにあるように感じています。メディアではこうした姿が美談として語られることもありますが、アマチュアレベルでは比喩的な「生と死」であっても、トップレベルの現実は決して生半可なものではありません。トップアスリートが持つ、痛みや苦しさへの耐性の高さ、そして彼らがどのようにアスリートとしての「生」を受け止めてきたのか。その奥には、彼ら特有の死生観があり、彼らが生きる世界に触れるときには、尊厳と丁寧さをもって向き合うことが必要であることを忘れてはいけないと感じました。そう考えると、自分はどれだけ本気で、彼らの命懸けの世界に向き合えていたのだろうか。そして今の自分はどうなのだろうか――山先生のご講演を聴きながら、そんな思いにも駆られました。

その他にも、震災後の東北での霊体験などを例に挙げながら、「境界や間（あわい）」で生じる体験についての考察や、セラピストとしての「ゆるく聴きながら、しっかりと聴く（Free Floating Attention）」という態度、質疑応答でのディスカッションなど、2 時間の講演は心理臨床を深く味わうひとときとなりました。

このような貴重なご講演をいただいた山先生、そして講習会を開催・運営してくださった学会関係者の皆様に、改めて深く御礼申し上げます。

【第 79 回研修会】　事例発表という体験

鹿屋体育大学　杉中　星河

午前中の山愛美先生による講習会『生と死の境界を超えて私の「物語」を生きる』は、とても有意義な時間でした。お話された内容は、明日すぐに役立つような“how to do”になるようなものではないかもしれませんが、私がどのように在りたいかの“how to be”を、今一度考える機会となりました。そこで、私には、生きている時間と死んでからの時間、そして生まれる前の時間という 3 つの時間軸のお話が特に響き、講習会の聴講を通して、私のときの流れを行き来することができました。前置きが長くなりましたが、山愛美先生のお話に触発されたままに、ここでは当日の事例発表体験について、発表前と発表の最中、そして発表後のいま、これらの流れに身を委ねて、少し振り返ってみたいと思います。

私は学部生時代に、京都の祇園四条のゲストハウスで、３年ほどアルバイトをしていました。ザ・安宿といった風の宿泊施設で、海外から来られるバックパッカーのお客さん達とよく話したり、夜勤業務のあいだを縫って時々一緒に観光や食事に出かけたりすることもありました。京都という土地は、そういった意味で私の中で思い出の土地です。今回の研修会・講習会が京都で開催されること、研修会での事例発表者を募っていることをお聞きしたとき、すぐに「今、ここであの事例を発表したい」と思い至りました。発表を希望し、段取りが決まり、準備をして、当日の朝に祇園四条駅に到着したときに感じたのは、外国人観光客の増加と円高の現状、気温上昇などあの頃と変わったものと、だけど変わらない京都の街並みとその風景、そしてそこにいる、あの当時には想像すらしなかった私のいまの姿とその境遇の不思議さでした。これらのことに思いを馳せつつ、会場へと足を運んでいました。

今回発表したのは、私のイニシャルケースでした。初めてのケース、初めてのプレイセラピーで、その過程ではクライエントの夢を見るなど、まさに夢中でお会いしていたものでした。当時はセラピー前も最中も終わった後も、起きている現象の意味や、関係性の動きなど、事例そのものについて、エクスクラメーションマーク（！）だけがその都度浮かんでは消えていました。事例を発表しているあいだは、フロアに向けて事例について話しつつ、一方ではあの頃の情景、汗、息遣い、疲労感などが目に浮かび、喉がカラカラと渇き、今一度事例を追体験しているような感覚がありました。本発表でのやり取りを通して、分からないことだらけで、経験値も無く、知識がないからこそ、セラピストがからだで応えていたのだと、改めて感じましたし、様々な角度からのコメントをいただくなかで、そのことの意義と危うさについて、一歩進めて感じることができました。同時に、答えは出ていませんが、あの頃といまとで、私のなかで変わったものと変わらないものがあるとすれば、それはなんだろうか…とも考えていました。

ところで、発表を終え、本原稿を執筆しているいまですが、今回の体験について語れる内容はまだまだ少ないというのが実際です。ただ、今回の講習会・研修会を通して、クライエントの方々とのあいだで、私自身とのあいだで、一回一回の生、一回一回の出逢いを大切にして、迷いながら進んでいく、そんな臨床家になりたい、そんな臨床家で在りたいと思いました。ここまで拙い文章でまとまりもありませんが、いまの私の立ち位置としては、ひとまずはこんなところで、むしろこれからの臨床活動のさき、今回抱いた感覚に、言葉に気づき、語っていく、そんなまだ見ぬ展望に私自身期待をし

つつ、擱筆したいと思います。

最後になりましたが、指定討論の中島登代子先生と名取琢自先生、司会の髙橋幸治先生、そしてフロアの先生方に見守っていただきながら、発表を終えることができました。この度は貴重な機会をいただきまして、誠にありがとうございました。

編集後記　人の生き死に、そして「命」という当たり前のことについて、私たちは日常あまり扱わないようにしていることに改めて気付かされます。しかし、臨床場面において、また、人と人との深い関わりにおいては、非常に大きな意味をもつものです。そのように考えると、日常のすぐ裏側、もしくはその下には、いつもそれがあることを忘れてはならないと思います。

（仁里）

SPACE　No.46
日本臨床心理身体運動学会　会報第 46 号
2025 年 7 月 20 日発行
日本臨床心理身体運動学会
会　長　山中康裕
編集責任　仁里文美
事務局　〒600-8449
京都市下京区新町通松原下ル富永町 107-1
株式会社 木立の文庫内
TEL：075-585-5277
FAX：075-320-3664
E-mail：office@rinsinsin.jp